

# 法華經義疏の研究

待に方便品に就いて

面 家 清 親

## 序 論

三經義疏の眞偽問題に就いて

## 本 論

### 第一章

太子の法華觀の特色

### 第二章

方便品に於ける法の解説

## 結 論

## 序 論

三經義疏の眞偽問題に就いて

三經義疏の成立の眞偽に就いては、從來多くの學者の間に依つて論ぜられて来た。

其の眞偽の中、偽撰を主張する學者の代表者は、津田左右吉博士を始として福井康順博士有り、此れに対して眞撰を主張する學者としては、義疏研究の權威者と云はれる花山徳勝博士が有る。

以下は此れ等の諸學者の説を研討して其の眞偽性について述べる事にしよう。

福井博士は先づ、維摩經義疏の上宮王撰である事を疑い、引いては法華經義疏にも及ぼんとするものである。其のホ一の偽撰の理由として、太子が唯摩經義疏を撰出たと云う事実は、日本書紀、上宮法王帝說尋信憑するに、聖德太子関係の文獻には見出し得ない。又從來其の眞撰を主張する學者の多くは、法隆寺寶藏帳の文、並太子伝補闕記等の文に依つてゐるが、いづれも太子薨後百二十五年以降のもので信憑するに足らず、又智光の淨名玄論略述、壽靈の著者に於ける、三聖義疏の文の引用も又権威あるものではないと、年代的整理に於いて再研討をせんものとしてゐる。

又一方維摩經義疏引文依り考察する時、百行章の文（愚人一徳、智者之師）なるものが引文されてをり此の百行章は、杜正倫の撰本されたもので杜正倫は太子の薨後三十六年に死亡、其の製作年代よりして、後人の説を太子が御引文になられたとは考へられず、又法華、勝鬘二義疏にては、しばしば「本義云云」とされているのに対し、唯摩經義疏にては、「肇法師云々」をくり返へされてゐる。又、他の二義疏のそれとは大いに異つてゐる等を挙げ、最後に花山博士は、法華義疏をもつて「維摩經義疏以後の御製作である」と考へてよからうと思ふとも見てゐる。斯くの如き推定を眞とするならば、然らば法華義疏なるものも其の眞偽が問題となるで有ろう。と語つてゐる。

此れに対し、花山博士は、日本書紀等、残存記録類に挙げられてゐない事柄は、すべて丁史事實として採用されるべきでない云う事をきめてかゝる事は正しくない。要するに記録は全体の一部で有つて現存の記録のみが丁史を伝へてゐるのではない。従つて残存記録類は單に參考に止め、其れよりも寧ろ其の内容から考察する事が先決問題である。然し維摩經義疏には單

本なき爲、法華義疏を以て此れを見るならば、現存の法華義疏の総長、紙頁、字体等については、奈良時代以前と云ふ事に断道専門家達の間に異論がない。又三經義疏の漢文について和集が少なくない、又仏教精通の学匠としてはあり得ない誤謬、又草本法華義疏四巻は著者自筆の原本であつて、初二次的筆写本ではない全四巻にわたつて見られる層々の追加文句や文字、修訂の爲のさまぐらな苦心の跡を注意深く研究すれば誰れにでも納得がゆく事である。又此れ等の修訂の筆蹟の加へられた箇處に於て、特に従来の支那大陸諸学匠の説と異つた独自の解説がなされてゐる事は特に注意されるべき点で、かゝる解説をなし得た古人、奈良朝以前で、而かも大陸の学匠でないとするれば、太子当時の史料は存せぬが、日本書紀の成立又以後のあらゆる史料が三經義疏を聖德太子の撰として伝承して来た事実と、三派の内容的研究からは、此れを太子の真撰とする事に何んの躊躇するが要がないと語つてゐる。

叔てかく西博士は眞偽について論じてゐるが此れは両者の主観の相違であり、一方は残存記録、一方は其の内面と、思ふに内容面のみを見て残存記録を輕視する事は大いなる誤りであり、又残存記録のみに依つて内容面を輕視する事は勿論いけない。研究の余地が有る。

## 才一章

### 太子の法華經觀の特色

太子の特色を見出す爲には先づ法華の義記を見ねばなるまい。何んとなれば、云う迄もなく太子の法華義疏なるものは、法華の法華義記に依據されたものである。然し依據されたとは云

へ、其の文、其のままを伝承されたのではない。撮るべき所は取り、棄つべき所は捨て、尚ほ且つ法華經の根本思想をより一層よく把握されている。

此の事は、本義釈を示して、「而今不須」とも「小異」とも「少々有疑」とも云はれ、又全然依憑する可きに非ざるを示しては、「本義不明」とも「不知其意趣」とも「超文煩叙」とも「番曲煩広」とも「而此不記」とも云はれている。又他自を示されるに及んでは、「私懷者」と云い「私叙」とも「私意」とも「懷者」とも云はれて其の意を示されている。斯くして讀された法華義疏は其の特色を、一言にして云うなれば、光宅の法華經觀の価値よりも、より一層其の価値を奨揚されたものであると云へよう。即ち法雲の義記製作當時は五時教判（涅槃經）が示すが如く、涅槃經全盛時代であり、従つて、義記に於いても其の時代的見地を脱する事が出来なかつたと思へ、やはり一仏來の常住思想を涅槃經に於て示し、法華經に於て譏害する事が出来なかつた。

此の事は、義記オ七に

「此經爲オ一者、若明稱會物機、爲オ一者、則五時經教、皆是稱會物機、今不論此、又言會前明後、詔爲オ一、會前看、設三來無異路、語乃善明同歸、明後看、明乃善皆成仏、焉命長遠、此則明涅槃前路、作常住之由漸、」

と示しているをもつて、涅槃經を最極として、法華經を涅槃經の前方便としか見ていゝなかつたのである。

然し太子に到つては、特に太子が一の字を加へ、一大來、一仏來、一大來機ともされている如く、其の思想を法華經に譏害すると共に、實際の面に着眼されている。即ち乃善同歸の公果、

法華の寶生業再啓と真相不相違背の實踐道に立脚された仏教として、經文、安樂行品の偈頌に「在於困處、修攝其心、安住不動、如須弥山」

の經釈に於て、法華義疏には

「由有剗削分別心故、若此處彼山間常好生羣、然則何暇弘通此經於世間」

とて其の意全く異にし、其の対色を示され、實踐道に重要視されている事が明確である。斯人の如く太子は、法華經を經理に又、實踐にと大いに其揚、唯一最尊として無二亦無三として、其の価値を引き挙げられたのである。

斯く法華經觀に於いて其の特色の一部を示したが、此れを法觀について見る時、やはり又、其の特色を見出す事が出来る。以下は法觀について示す事にしよう。

## 第二章 方便品に於ける法の解釈

太子は當岳に於ける法觀を如何様に解釈をなし又其れを表現されたのであるのか。以下は其の事について記す事とする。太子の法觀は、方便品經文の

「仏所成就第一希有難解法、唯仏与仏乃能究盡諸法真相、如是性、如是体、如是力、如是依、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等」

此の仏と仏との間に究盡せられた「諸法真相」なのである。

太子疏は先づ初に、三衆が方便であつて、異説でないこと、此等の方便に依つて已れを顯す



一、来こそ実である事を説明される。然し、三来は己小の立場が方便である事を自覚せずして此れを真説として主張する。引文すれば

「夫如来明此法華之大意者、但欲遺昔日三因三果、令得今日一因一果也。然衆生神廟根鈍、不可卒然顯說是以於開三、一住但略言弘以方便力示以三衆教。於顯一亦略言世尊法久後要當說真実、乃至、衆生聞昔日有三、教以爲実」

と然し今や其れが方便であること、従つて「方便の真相」を明かにされるのである。其外でかく方便として現はれる諸法を立てるのは「権智」の能であり、其の真相を知るのが、「実智」の能である。とせられる。三来の立場に於ける如くそれぐの差別的体系を立てるのは、権智の能であり、人、機、教、理、の四が一であるところの四一境を照らすのが実智である。其外で「諸法謂権智所照、謂三三境中三教真相謂四一境中一理也」と、即ち諸法の真相とは、実智が照す所の諸法真相の境である、即ち「一理」である。斯くしてあらゆる眞つた立場が一の「理」の方便としての現はれに外ならぬことが明かにされるのである。即ち其の根本思想は一仏来即ち、一の理があらゆる相反対立の諸体系の根柢であると云う事である。従つて、一の理も亦、かゝる方便を通じてのほかに直接に己れ自身を頭わす事が出来ないだから「一仏来」を説く法華經の法親は、三来から離れた独自の法を説くのではなく、三来の法がまさに一つの理の方便的表現であるという事になる。故に「同師の妙因」とも又「眞二の大果」とも記されているのである。

かゝる解釈は法雲の教記にも示されている所であるが、然し最極の常住の理はあく迄涅槃にありとし、法華經は前方便を開三すると共に又後の常住の理を示す涅槃經を開顯したものとす

て其の価値を見ている。又天台は、太子の示される諸法なるものとは其の意、大いに異つてゐる。即ち天台に於いては、「諸法は実相なり」の意に讀まれ、現象即實在論であると言へばれてゐるのである。かく二者と対比せる時、太子の独自の特色を法親に於て見出す事が出来るのである。

## 結 論

先述の如く、太子に依つて開顯せられた一大衆の思想は、將來の日本仏教に如何なる影響を及ぼしたのであるうか。

先ず「一大衆」の仏教につけて考へる時、奈良時代に興つた華嚴一衆、平安時代に興つた天台の四戒一衆、並に真言の秘密金剛一衆更に鎌倉時代の新興、他力本願念仏の教、道元禪師の修證一衆、日蓮上人の法華本門一衆等、我が日本の仏教は、終始一衆仏教をもつて一貫して來たのである。

然して是等の種々の一衆仏教の興つて來た本原を尋ねる時、其れは聖德太子の「一大衆」の仏教に趣向するのである、従つて多くの仏教信仰者より和国の教主として尊稱されるものとなつたのであらう。